

短 報

看護学生・看護師のための集中医療英語研修
（カナダ・マギル大学）報告

—プログラム開発，実施，評価，改善—

井上 麻未¹⁾ ハフマン・ジェフリー¹⁾Report on the Medical English Study Abroad Program for Nursing Students
and Nurses at McGill University, Canada

—Development, Implementation, Evaluation, and Improvement—

Mami INOUE, MA¹⁾ Jeffrey HUFFMAN, MEd¹⁾

〔Abstract〕

In this report, we highlight the characteristics of the Medical English as a Foreign Language (EFL) for Nurses, a study abroad program jointly developed by McGill University and the English faculty at St. Luke's International University (SLIU). Then we describe the process of development, implementation, evaluation, and improvement of the program.

The program has been held twice, in March of 2014 (14 participants) and 2015 (13 participants). In March 2015, the authors conducted an on-site observation and program evaluation.

This program was specifically tailored to the needs of SLIU students, incorporating a novel three-module approach designed to integrate language study with nursing-related content. It also provides a variety of opportunities for communication practice such as a monitor system (which increases interaction with native speakers), planned interaction with nursing students and faculty, homestay, and cultural experiences.

Student feedback, along with the on-site evaluation, has identified a number of areas for improvement, such as incorporating shadowing in the visits to medical facilities, improving the linkages within the three-module system, and increasing the interaction with McGill nursing students. The SLIU English faculty has worked closely with McGill to address these concerns and improve the program year by year.

〔Key words〕 study abroad, content-based instruction (CBI), English for special purposes (ESP), program evaluation, medical English

〔要 旨〕

本稿は、聖路加国際大学の英語教員がマギル大学と協働で開発した『看護師のための集中医療英語研修』のプログラム概要と特色、開発プロセス、実施、評価、改善内容について報告する。本プログラムはカナダのモントリオールにあるマギル大学において、2014年3月と2015年3月に2回実施され、参加者はそれぞれ14名、13名であった。2015年には井上とハフマンが現地で研修を視察し、プログラム評価を行った。

聖路加国際大学の学生のニーズに応えることを最優先とし、2013年より看護のコンテンツと語学学習を効果的に結びつけたプログラム開発に着手した。2014年に、3つのモジュールで構成される新しいプログ

1) 聖路加国際大学看護学部 基盤領域（英語） St. Luke's International University, Social Sciences & Humanities / Fundamentals of Research (English)

ラムが完成し、実施の運びとなった。先駆的なプログラム構成に加え、カナダ人学生モニターやマギル大学看護学部との交流など、異文化体験や英語でのコミュニケーションの機会を十分に提供できる研修内容となっている。

マギル大学と本学の英語教員は、参加者のフィードバックや視察による評価をもとに毎年プログラムの改善を行い、質の高い研修実施のために継続的に協働作業を進めている。

【キーワード】 海外研修, コンテンツ・ベースド・インストラクション (CBI), ESP, プログラム評価, 医療英語

I. はじめに

『看護師のための集中医療英語研修：Medical English as a Foreign Language (EFL) for Nurses』(以下：本プログラム)は、聖路加国際大学とマギル大学が協働で開発したプログラムである。2014年にスタートし、カナダ、モントリオールのマギル大学で毎年3月に実施している。本プログラムは本学の学生、大学院生および聖路加国際病院の看護師を研修の第一の対象者としてマギル大学と開発したカスタムメイドの研修であり、本学と聖路加国際病院からの参加者が、特に、多くの学びを得ることができる研修となっている。

実施にあたり、2013年より、英語教育において定評のあるコンテンツ・ベースド・インストラクション (CBI) の理論をベースにマギル大学と綿密な議論を重ね、1) 看護・医療英語のクラス、2) 看護関連トピックスセミナーとワークショップ、3) モントリオールの病院、健康医療施設での見学実習という3つのモジュールを効果的に組み合わせることで、先駆的な看護・医療英語研修の開発を実現した。

本稿では、本プログラムの概要と特色を明らかにしたい。具体的には、プログラム実施の過程で、質の高いプログラム開発のために、参加者からの意見をいかに取り入れプログラムの改善につなげてきたか、さらに、本学とマギル大学がどのように継続して積極的に協働作業を進めてきたかに焦点を当て報告を行う。

II. プログラム概要

1. 教育的アプローチ：看護学と言語学のインテグレーション

現在、本学には多くの交換留学や海外研修プログラムがあり、海外での学びのための潤沢な選択肢が用意されている。従来、これらの留学や研修プログラムは、マギル大学での夏期語学研修のように語学を集中的に学ぶ研修か、韓国やタイなどの留学先の国の看護学部や保健医療施設で学ぶ研修等の2つのカテゴリーに分かれていた。

しかし、言語習得理論の観点から、本学の学生のためには、これらの2つを結びつける研修の必要性、つまり、看護や医学のコンテンツと語学学習が効果的に統合しているプログラムの実現、具体的には「看護英語を学んで、英語で看護を学んで、看護の現場で使う」ことが可能である、新しいタイプの研修の開発の必要があると考えた。

このような経緯から、本学の英語教員はマギル大学と協働で以下のような新しいプログラムの開発に着手した。本プログラムでは3つのユニットが展開され、1つのユニットは、例えば「老年看護学」など1つのトピックをカバーする。さらにそのユニットがModule 1 - Module 2 - Module 3 という3つのモジュールで構成される。Module 1は看護・医療英語クラスであり、EFL (English as a Foreign Language) のスペシャリストを講師とし、Module 2 および Module 3 で必要となる語彙や表現を集中的に学習する。Module 2 では Module 1 での学びをもとにマギル大学看護学部の教員、研究者、大学院生の講義を受ける。さらに、Module 3 では Module 1, 2 の学びを生かして病院や健康医療施設で看護師同行の見学実習を行う (図1)。Module 3 はシャドーイング実習も含む。

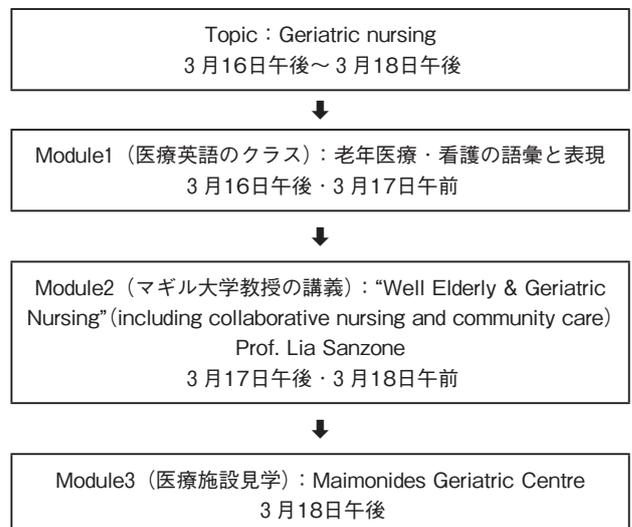


図1 1つのユニット (トピック) における3つのモジュールの展開例

本プログラムの“three-module approach”は第二言語習得（SLA）の分野でよく知られているコンテンツ・ベースド・インストラクション（CBI）の理論に基づいたものである。CBIとは、語学学習において言語のみ学ぶのではなく、習得しようとする言語で専門分野を学ぶことに力点を置く理論である。“Adjunct CBI”とはCBIの中でも、学生は習得を目指す言語で専門分野について学び、さらに、その専門分野のコースのシラバスに密着した語学指導を提供するEFLコースで語学を学ぶというものである¹⁾。本研修の最大の特徴である“three-module approach”とは、この“Adjunct CBI”に基づいたものである。

本研修においては、上記の通り、異なるトピックを持つ3つのユニットが展開される（e.g. ユニット1-母性看護・助産学、ユニット2-老年看護学、ユニット3-急性期看護学）。3つのトピックは毎年変更可能であり、参加者の要望をできるだけ反映したトピックを選ぶよう事前研修で参加者の希望を聞き、マギル大学側と調整を行いスケジュールを組んでいる。

2. コミュニケーション練習と異文化体験の機会の提供

本研修では、参加者に豊富な会話練習と異文化体験の機会を提供できるよう、第2回目研修より「モニター制度」を導入している。「モニター制度」とは、マギル大学の学生が病院、施設見学に同行し、見学実習の後の振り返りの会をサポートし、参加者がカナダの生活文化に触れることができるよう課外活動と一緒にを行うという制度である。課外活動の幅は広く、「北米のパリ」と呼ばれる美しい多文化共生都市モントリオールでは様々な社会文化体験が可能である。さらに、参加者はマギル大学の看護学部（Ingram School of Nursing）を訪問し、実習室等を見学し、学生や教員と直接交流することができる（写真1）。



写真1 マギル大学 Ingram School of Nursing の nursing laboratory にて看護学生との交流

研修中はカナダ人家庭にホームステイをし、日常英会話の機会を得ながら、現地の生活文化を体験する。

3. プログラムの参加対象者・実施時期と費用

本研修には英語力と看護知識が共に必要であるため、学部3、4年生と大学院生、そして看護師を対象としている。学部2年生であっても、参加の意欲と自信があれば参加可能である。さらに、他大学にも広く門戸を開いており、現在はマギル大学の“School of Continuing Studies”の正式なプログラムの1つに認められ、海外の大学からの参加も可能である。研修の実施時期については、3月の本学の卒業式の翌日を出発日とし、3月末に帰国できるよう日程調整を行っている。2016年の研修は3月11日から26日までの16日間、授業料、課外アクティビティ、3食付きのホームステイ費用、エクスカージョン、大学・空港間送迎費用を含む研修費用は約3,150ドル（CAD）の予定である（航空券代金は別途必要）。研修実施のための最小催行人数は12名となっている。

Ⅲ. プログラム開発と実施・改善

マギル大学は1821年創立のカナダで最も歴史のある名門大学であり、米国の臨床医学教育の基礎を築いたウィリアム・オスラー博士（William Osler, 1849 - 1919）が卒業し、医学部で教鞭をとった大学として世界的に知られている。本学では1994年から20年以上にわたり、「海外語学演習」（英語選択科目）として、マギル大学の夏期語学研修に留学を希望する学生を送り、2単位を認定してきた。

夏期語学研修を通してマギル大学と築いてきた信頼関係をもとに、2012年秋のマギル大学の担当者来訪時に本学の英語教員が看護英語研修の新しいプログラムの新設を提案し、マギル大学より賛同を得てプログラム開発がスタートした。2013年度にプログラムの詳細設計を行い、新たな研修の開発をマギル大学と協働で進めた。

1. 2014年第1回目研修と参加者フィードバック

第1回目研修は2014年3月12日から3月25日に実施され、14名が参加した（聖路加国際大学学部生5名・大学院生6名、聖路加国際病院看護師1名、他大学からの看護学生2名）。

8名の参加者から研修後にアンケート調査をしたところ、全体的によい評価を得ることができた。アンケートは5段階評価（5段階のリッカートスケール：満足度の高いものに5、低いものに1の評価）を用いた。すべてのModuleの「内容」「指導者」「サポートスタッフ」という項目については4-5の評価であった。Module 2は数名が3を付けている。「Module間Ⅰ～Ⅲそれぞれの関

連性」の項目に関しては3-4の評価であったことから、参加者にとって3つのModuleの並び方やつながりが明確ではなかったことが考えられる。英語力の進歩については、「スピーキング」「リスニング」「看護・医学英語」の項目はそれぞれ3-4の評価であった。「生活全体」(ホームステイ、生活全般の利便性、マギルの学生・スタッフ・教員との交流、英語を話す機会、安全性など)の項目もほとんどが4-5と高い評価を得た。しかし、「マギルの学生・スタッフ・教員との交流」の項目には3の評価もあり、その理由としてマギル大学生と教員との交流の機会を増やしてほしいという意見が記載されていた。

「カルチャープログラム」についての項目(トロントナイアガラ、平日午後のプログラム、フリータイムの充実度)のほとんどが3-4であり、ナイアガラの滝への週末旅行についてのコメントが多く寄せられていた。参加者にとって旅行に費やされている金額が高いという印象があり、加えて寒さや天気が最悪の状況であった。さらに、旅行に同行したスタッフが参加者の疲労の度合いを見極めることができず、参加者のスケジュール変更に関する要望に対応できなかったという問題も重なった。この週末旅行について、参加者のほとんどが1を付けている。プログラム全体の評価については、4名が5(50%)、3名が4(38%)、そして1名が3(13%)という評価であった。

2. 2015年第2回目研修に向けての改善目標

上記のアンケート結果をマギル大学のプログラム担当者に伝え、以下の5点に関して改善を求めた。1) 3つのModuleの間のつながりをわかりやすくすること、2) 看護学生と教員との交流を全体的に増やすこと、3) ナイアガラの滝への旅行をローカルなアクティビティに変えること、4) ナイアガラの滝に同行したスタッフから旅行についての説明をもらうこと、5) 事前に参加者により詳細なスケジュールや、地下鉄の切符の買い方、Wi-Fiのつなぎ方、学生証発行の手順などを説明すること。2014年に本学の英語教員はマギル大学のスタッフと話し合いを重ね、問題点を解決するようプログラム改善に努めた。

3. 2015年第2回目研修の参加者フィードバックと現地視察による評価

第2回目研修は2015年3月11日から3月26日に実施され、13名(聖路加国際大学学部生8名・大学院生1名、聖路加国際病院看護師1名、聖路加産科クリニック助産師1名、他大学の看護学部生1名、現地留学中の日本人看護師1名)が参加した。

この第2回目研修では、本学の英語教員2名(筆者)がマギル大学に視察に行き、3日間のプログラム評価を

行った。視察の最も重要な目的は、前年の研修で明らかになった問題点の改善の確認と、さらなる改善点を探ることの2点であった。

初回の研修のフィードバックから、第2回目の研修では、3つのモジュールのつながりをより明確にする必要があった。Module 1からModule 3の授業、講義、見学という一連の流れを実際に体験し、改善を目指した通り、3つのモジュールのつながりが明確になり、各モジュールがしっかりと結びついていることがわかった。

具体的には、Module 1の医療英語クラスとModule 2のマギル大学教授の講義を見学し、続いてModule 3の3つの医療施設見学に同行した。Module 1と2に関しては、授業・講義内容、教授法ともに優れて素晴らしいものであった。Module 3について、見学先の医療施設は参加者の興味関心に合致する施設であり、見学中は看護師、ナースプラクティショナーが有益な説明を行い、参加者からの質問に熱心に回答していた。しかし、グループが大人数で時間の制約もあったことから、早口での説明となり、質問時間も短いため参加者は説明のすべてを理解することが大変そうな様子であった。また、施設の看護師が患者の方々と接している様子を見学する機会はなかった。

マギル大学の学生、特に看護学部生との交流は前回から大幅に改善が図られていた。しかし、さらに改善の余地があることがわかった。第1回目研修のフィードバックから、マギル大学の学生との交流の場と、英語コミュニケーションの機会をより多く参加者に提供するために、現地のカナダ人学生が参加者を学習面、生活面でサポートする「モニター制度」を新たに導入した。実際、視察により「モニター制度」が非常にうまく機能することがわかった。学生モニターは見学実習先や課外活動に同行し参加者をサポートし、一日の最後の振り返りの会では参加者が学生モニターと意見交換や会話を楽しむ場を毎日用意していた。さらに、2015年の研修ではマギル大学の看護学部である“Ingram School of Nursing”を訪問し、看護学部の先生方と学生との直接の交流が実現した。看護学部で、学部施設の説明やカナダの大学・大学院での学びや研究の説明を受けることができ、よい機会となった。しかし、問題点としては、本研修期間がマギル大学の学生が多忙な時期と重なるため学生モニターの確保が難しく、ほとんどのモニターがモンリオールの他大学の学生であったことが挙げられる。

なお、前年度からの改善点として、不評であったナイアガラの滝への週末旅行は、学生モニターとのカフェや教会への外出や“sugar shack”の日帰り旅行など複数の短いモンリオールでのアクティビティに変更されており、学生の体力的な負担が軽減されていた。

新たな課題として、街中で参加者1名が携帯電話を盗

まれ、1名がスリの被害に遭ったことから、事前の安全指導の強化が必要である。

参加者アンケート（回答12件）は、前年の研修の問題点が解決され、プログラム全体の改善が図られているという視察の評価を裏付ける結果であった。2015年の研修についても2014年と同様にアンケートは5段階評価を用いた。参加者の3つのモジュールそれぞれの評価は4-5であり、3つのモジュールの関連性についての評価は4-5であった。「英語力の変化」のうち、特に、「スピーキング」「リスニング」「看護・医療英語」の英語力の変化についての項目は前回より自己評価が向上し、参加者の多くは4、数名が5と評価している。生活全体に関する、「ホームステイ」「生活全般の利便性」「マギルの学生・スタッフ・教員との交流」「英語を話す機会」などの項目では5と評価する参加者の割合が前年より多かった（3の評価があった「安全性」の項目を除く）。「カルチャープログラム」については4-5の評価が多く、プログラムの全体評価では、7名が5（58%）、5名が4（42%）と評価し、前年より良い結果となった。

4. 2016年第3回目研修に向けての改善目標

参加者からのフィードバックと現地視察の評価から、プログラムの一層の改善を目指し、2016年の第3回目研修に向けてマギル大学に下記の提案を行った。

第一は、初回研修で実施され高評価を得たシャドーイング実習の再開である。2015年は、大規模病院 MUHC 新設（The New McGill University Health Centre）に伴う複数の病院の移転、合併のために実習先の確保が難しくシャドーイング実習を Module 3 に組み込むことができなかったが、2016年の研修では再開の見込みである。

第二は、学生モニターをできる限りマギル大学生とし、可能であれば看護学部の学生に担当してもらうことである。さらに、看護学部の学生と教員との交流の質的充実を提案し、具体的な方策を検討中である。安全面に関しては、事前オリエンテーションを通して情報提供と安全指導の強化を図っていくこととした。

IV. 総括と今後の方針

本プログラムは日本の看護学生と看護師にとって非常に高い研修効果が期待できる研修である。プログラム開発においては、本学の学生のニーズに応えることを最優先とし、本学の看護英語教育の蓄積と第二言語習得の優れた理論と研究をベースにマギル大学の一流の人的資源を活用した質の高い研修の実現を目指し、2013年よりマギル大学と協働してきた。2014年の第1回目研修以降、参加者からのフィードバックと現地視察による評価の分析をもとに継続してプログラムの改善を行っている。本プログラムの実現により、本学の一連の海外研修プログラムに新たに「看護を英語で学ぶ（看護+英語）」本研修を加え、学生の海外研修の選択の幅と学びの機会を拡大することができた。

本プログラムへの参加者は、研修を通して、英語力、看護、医療の知識、異文化に対する感受性を高めることができるだけでなく、人間的な成熟やしっかりとしたアイデンティティの確立など様々な点で大きな成果を期待できる。第1回目の研修を経て、第2回目研修より「聖路加国際大学 学生国際奨学金」等、全学的な理解とサポートを得ることができたことは今後のプログラムの発展にさらに大きくつながっていくと考える。このような支援体制のもと、学部生、大学院生および聖路加国際病院の看護師の本研修への継続的、積極的な参加が望まれる。

本学の教育理念である、「日本および国際社会における看護の機能と役割を広い視野で多面的にとらえ、保健医療・福祉システムの中で責任を担う姿勢を持つ」人材を育成するというディプロマポリシー、および「グローバルな人材育成のため英語力の強化を図る」というカリキュラムポリシーに合致するプログラムとして、本学の教育に寄与すべく、学生のニーズに合わせ、今後も毎年プログラムの改善を進めていく予定である。

参考文献

- 1) Brinton, D. M., Snow, M. A., Wesche, M. (2003). *Content-based second language instruction*. Ann Arbor, MI : The University of Michigan Press.